

縄文文化における信仰の原風景をさぐる

米 沢 弘

On the Original Image of Faith in the Jomon Period

Hiroshi Yonezawa

This article examines the original image of faith in the Jomon period (the New Stone Age in Japan). The discoveries of Sannai-Maruyama archeological remains in the southern part of Aomori City since 1992 have drastically changed the previous image of Jomon people as a group of primitives driven to look for daily foods.

The discovery of several pillars made of big chestnut trees with a diameter of nearly one meter, have led to conjecture of a structure over twenty meters high and the existence of large Jomon village between 5500 and 4000 years ago.

This article also discusses remains in the Hokuriku Area, which were accompanied by discoveries of big trees, and the Stone Circle around Towada Lake. It also mentions the Kamegaoka culture in the latest period of Jomon, from which uniquely expressive earthen figures with a kind of snow goggles (somewhat like Inuits) called "Shakoki Dogu", as well as elaborately lacquered earthenwares and woodenwares with "japan", were excavated. In essence, our image of the spiritual life of Jomon culture, especially as related to festivals, is the main concern of the author.

はじめに

それは三内丸山ショックと言ってよいだろう。1992年の春から始めた、青森市南西部の三内丸山における県営野球場建設にともなう緊急発掘が、私たちの縄文文化に対するイメージを一変させる数々の発見をもたらしたことはよく知られている。

各間隔が4.2メートルで二列に並んだ6本の栗の柱の穴（その中には直径が1メートル

ほどの柱の根元の部分、但し腐食のために10センチほどやせ細っていたものが残っていた）それから推測される高さ20メートルほどの巨大な構造物、二列に長く続く大人の墓（子供の墓は住居跡の近くにある）、ヒスイの大珠や土偶が出土する（日本最大の板状土偶が出土した）莫大な土器片を含んだ盛土、網代編のほぼ原形をとどめたポシェット（その中には半分に割られたクルミの殻が入っていた）、その他赤い漆の木器や、1.2メートルほど

の舟の櫂などの木製品や動物や魚の骨、木の実などが大量に残る泥炭層、また多くの住居跡、それは5500年前から4000年前まで1500年住み続けられた縄文都市の出現であり、最大500人程度の人々が住んだ可能性もあり、今までの日々の食物の採集に追われた貧しい縄文人のイメージの一新を迫るものである。

幸い野球場建設は中止され、出来上がった2つのスタンドは取り壊され、遺跡は保存し、建造物は学習用として復元されることになった。

三内丸山遺跡は有名な亀ヶ岡遺跡とともに江戸時代中期から知られた遺跡であり旅行家の菅江直澄は『すみかの山』(1759年)の中で三枚の土器と土偶のスケッチを残している。今回の新石器時代の巨大な重要な遺跡の発見は、近年第五の古代文明の出現として注目される、揚子江下流の5000年前の良渚文化の源流とされ大量のモミを出土し(米粒をもともない7000年前とされる)注目された1973年に発掘された川姆渡遺跡、またそれにつづき権力の象徴である玉類(玉琮, 玉璧, 玉鉞など)が出土し注目される、1986年に発掘された反山墓地も加えてさらに1996年には日中共同の長江文明の学術調査により、長江上流の成都市の南西50キロの竜馬古城造跡の発掘により古代の神殿もしくはジググラト(階段状のピラミッド形構造物)と思われる造跡が発掘されたが、これらに匹敵するものが、黄河、揚子江と言った大河は無い日本でも海岸沿いの適地に見出だされたと言うことで、これは栗の栽培を伴うブナ樹林(栗はブナ科のクリ属である)の豊富な木の実と海産物による一つのタイプの新石器時代の文明の拠点遺跡の発見であると言ってよい。

普通、縄文一万年と言うが、草創期三千年、早期三千年、前期千年、中期千年、後期千年、晩期千年に区分する。日本では一万二千年程前の世界最古の部類の土器が出土している。

巨木の出現を伴う遺跡について

三内丸山遺跡での巨木の出現は、すぐに日本海沿岸の北陸地方の巨木の出現を伴ういくつかの遺跡との関連を考えさせるものだが、先ずはじめにこれらについて述べておこう。なお遺跡それ自体について述べるものではなく、目下考えようとする主題に関する点にのみふれるにとどまる。

いずれも有名な遺跡だが、直ちに思い出されるのが、能登半島の東側の能都町の真脇遺跡、金沢市西部のチカモリ遺跡、新潟県西端の青海町の寺地遺跡である。

同じ巨木の柱根が出土したといっても、巨木の半裁ないし三分の一裁により、切った平面を外にして円柱のサークルを描くチカモリ遺跡や真脇遺跡の場合と、四本の柱が四角に並ぶ寺地遺跡とを必ずしも一緒に考えることはできない。寺地遺跡の場合は諏訪大社の社殿をかこみ四方に立つ御柱との関係をより多く考えてみるが必要となる。

先ずチカモリ遺跡の場合だが、それは縦に半裁された栗の大木を、半裁の平面を外にして直径7メートルの真円となるように配置したもので、根元の部分が地中に残っており、その中には直径90センチを越えるものもある。なお入口のように二本の柱が向かい合って立っており、現在はその景観をしのぶために地上3メートルの木柱のサークルとして復元されている。

この円形の巨木のサークルは円形舞台とも言えようが、もう一レベル大きい超巨木をイメージするものとも考えるのだが、それは天にとどく「世界の樹」を意味したものであろう。「世界の樹」についてはしばしば論ぜられているので、省略することとして、真円といったものがどんな意味なのかと言った点についてだけ考えてみよう。

縄文時代の人々にとって、何時も接することのできる真円は太陽である。無論、月も満

月の時は真円に見えるが、太陽は日没まで常に輝く真円であり、またそのため日食というものがカミの死として恐れられたわけである。

私たちのよく知っている古代の円形の表象は、時代が下がる古墳時代の円形の銅鏡があり、それは権威の象徴であり時には御神体であった。世界各地を見渡すと有名なものとしてアステカの暦石（こよみいし）、シバ神（ナタラージャ・舞踏王）がその中で踊る火の円輪、チベットのマンダラまた中国の玉琮ぎよくそうの天を象徴する円やパリのノートルダム寺院のバラの窓など、いずれも聖なるものであり祭儀に関するものである。（円形の表象についてはユングがマンダラ夢の中で多くの例をあげている）

太陽が円に見えるということは、人間の目と脳の構造によるものだろうが、コンパスといったような道具もなく（もしかするとそれに代る何等かの方法、ヒモの一端を固定して円を描くというような技術をすでに知っていたかも知れないが）縄文人にとっては円とか直角といったものに日常接する機会の少ない、（またそれ故にチカモリ遺跡では、四辺が直角の長方形に並んだ6本の柱が円柱以外に残されているのだが）非日常的な何か——それは後に聖といった価値意識に発展する厳正な規範を意味するものであったろう。

真脇遺跡の場合、同じ栗の柱でありながら、芯部を外した三裁（三枚おろし）で、最大の直径は98センチを越える。真脇遺跡の場合、円環は3回にわたり立て直されており、目下のところ部分的発掘だが（これは用水路をつけ変えるための緊急発掘であった）、最大の円環は直径7.5メートルで、次が6.2メートル、最と小さいものが5.3メートルであり、いずれも10本の木柱から成ると考えられており、いずれの円環も縄文晩期のものとされる。

三内丸山遺跡の場合、一体どれ程の加重が柱の下に土にかかっていたかといった測定がなされ、それからどの程度の構造物である

という推定がなされたが、この種の調査はこれからの発見の際には行なわれようが、チカモリ遺跡や真脇遺跡の場合、このような精密な調査はなされていない。

真脇遺跡は、6000年前から2300年前まではほぼ4000年間の長期定住型の遺跡と考えられているが、もう一つこの遺跡を有名にしたものが大量のイルカの骨が出土したことであり、カマイルカやマイルカなどが主であるが、地下3メートルほどの縄文前期末から中期初期の層のイルカの骨の出土した光景は圧巻で、骨だらけであつとされている。また木製のトーテムポール状の木柱が出土したことも有名である。もっともトーテムポール状と言っても、盛岡市萩内（しなない）遺跡の円空仏のようなもの（65.5センチほどのもの）と比べてより抽象的であり、またイルカの骨の中から出土しており（長さは2.25メートルと大きい）、それはイルカの魂送りの祭儀と関係するものと考えられる。（このあたりでは近年までイルカの追い込み漁が行なわれていた）

木柱の円環のより小ぶりのものは、金沢市の米泉遺跡からも出土しており、距離的にも近いので、これらは一つの文化圏を形づくっているものと言えよう。なおこれらの木柱環は次章で述べる大湯のストーンサークルとは異なり墓地ではない。

同じ北陸で日本海沿岸ではあるのだが、新潟県西端の青海町の寺地遺跡は、以上述べてきた木柱遺跡とはかなり異なっており、杉の木の本四本からなる柱は、諏訪大社の7年ごとにたてかえられる御柱（上社の本宮、前宮、下社の春宮、秋宮の各本殿の四角をかこむもの）を連想させる。

諏訪大社の場合、その用材は古くは唐檜、さくら榿、唐松なども用いられてきたと言われるが近年は樅の木に統一されている。なお諏訪大社の場合、神前に鹿の首を供えるといったような狩猟時代をしるべき儀式も残ってい

る。

今までに述べてきた遺跡の中で、寺地遺跡は最も不幸な遺跡であると言ってよい、同じ緊急発掘なのだが、寺地遺跡の場合、市街地にあるためか木柱の出土した部分はアスファルト道路の下となっており、道路から外れた部分にヒスイの作業跡が復元されているが、建物の建造による破壊や川の氾濫などにより遺構は度々攪乱されている。

寺地遺跡の場合は、複雑な配石遺構なのだが、簡単にいえば北西と南東に二つの楕円の環状配石があり、それを結ぶ廊下状の配石がある。この南東部の配石遺構の中に方形な区割りがあり、その中に4本の丸形の木柱が方形に並んだものが見つかった。方形の一辺は1.4メートルで、木柱は樹皮を外した直径60センチ程のもので、敷石から上に出た部分は腐り、本柱の間際まで敷石が敷かれていた。この寺地遺跡では青海川産のヒスイを加工していたと考えられるもので（有名なヒスイの産地として知られる姫川上流の小瀧川とともに、近くを流れる青海川もヒスイの産地である）、この遺跡は極めて豊かないわば交易の中心地であり、重要な遺跡であったと思われるだけに現状は惜まれる。

三内丸山遺のヒスイもこの辺りのものなのだが、ヒスイの大珠は極めて貴重なものだっただけに、（中国では周の時代から、明の時代まで玉や玉器を尊重するが、中国の古玉は軟玉〈硬度6.0から6.5〉であり、日本のヒスイは硬玉〈硬度6.5～7〉であり、それだけに加工が大変である）その産地の遺跡がこのような極めて珍しい遺構であったことも十分に納得できる。この遺跡ではヒスイを他地方に送るための特別な祭儀が行なわれたのではないだろうか。

よく知られる様に、日本の神社では、大神神社や諏訪大社のように本殿がないのが仏教渡来以前の形だが、やがて四本の柱で聖なる空間を造ることになる。（これは現在でも新

築の建前で行なわれているが）、相撲の四本柱も元来はこの意味であったろう。（但し現在では危険をさけて四つのフサに変わっているが、土俵の円と方形角を形づくる空間は玉琮やマンダラと同じである）なお諏訪地方では、大社には大きな四本の御柱だが、中程度の社には中程度の御柱を、また小さな祠には小さな御柱を四方に立てる。それは必ずしも巨木でなくても聖なる空間を形づくる結界であると言ってよい。（東信地方では四本ではなく一本だけ建てている場合があり、いずれが古形かは検討を要する）

これらの点からみて、寺地遺跡の丸木の四本の柱は、距離的な点からみても諏訪の御柱との関係を一層考えることが妥当であろう。

いずれにしろ真円や、方形の空間といったものは、少なくとも縄文時代には聖なる空間を形造るシンボルであると言ってよいだろう。

日本のストーンサークルについて

日本での円環の遺構として早くから有名なものが大湯のストーンサークルである。

秋田県の東北端と言うよりは、十和田湖の南岸に近く、大湯川と豊真木川にはさまれた大湯に万座の環状列石と野中堂の環状列石とが90メートルほど道をへだてて並んでいる。名称の違いは、道を隔てて所在する字の違いによるもので、西北が万座、東南が野中堂である。いずれも数個から十数個の大小の川原石を円形や方形に組み合わせた遺跡の集合体であり、これらの配石遺構は二重のサークルを形造り、いずれも内側と外側のサークルの間の西方の空間に、有名な日時計のような組石が一つずつ置かれている。サークルの大きさは、いずれも外側のサークルが万座遺跡の方が46メートル、野中堂のものが42メートルと大規模なものである。保存状態は万座遺跡の方がよく、野中堂のものは組石がかなり河川の護岸用や庭石等に使用するため持ち去られ遺跡の破壊が大きい。

この二つの遺跡では、野中堂の二重のサークルの中心点から、日時計型の組石を結び、それを延長すると万座の二重のサークルの中心点を通り、さらに万座の日時計型の組石を通り、それはおおかた夏至の際の日没の方向を示すものである。(但し厳密ではない)

このサークルを構成する各組石の下には墓塚があり、人骨は残っていないが、近くの遺跡を参考にすれば、おそらく死体の頭の方向が西方を指していたものであろう。

大湯の遺跡一帯は水の出の多い所で、その発見自体が耕地整理のためだったが、余り耕地には相応しくないため原状は比較的良好に保たれている。この遺跡の発見は昭和6、7年とされるが、遺跡の発見が昭和6年で、それが環状をなすことが知られたのが昭和7年と言うことになるだろう。

この大湯のストーンサークルは、日時計状の組石の遺構の写真が、高校の教科書にのほど有名なものだが、近年このあたりから多くの遺跡が出現し調査が行なわれている。関連する遺跡は北東には300メートル、南西には180メートルに及ぶ。野中堂遺構の北東300メートルの地点に大規模な配石遺構群が、万座遺構の北方20~80メートルに四基以上の配石遺構があり、150メートルの地点には縄文時代後期の住居跡が発見されるなど、今後の調査の待たれるものである。

この大湯のストーンサークルは、言わば十和田湖周辺の環状列石文化とでも言うものを形成するもので、十和田湖周辺にストーンサークルが分布するが、その中で近年有名なものに青森市野沢の小牧野遺跡がある。

小牧野遺跡は、名前のとおり馬の放牧場であったわけだが、青森市の市街地の南西に10キロほどで、荒川と入内川にはさまれた台地の上であり、斜面の高い部分を削り、その土を低い部分に運び平面として踏み堅めた広場の中にあり、独特の組石で知られたもので、小牧野式とよばれる。

問題のストーンサークルは、直径3メートルの配石を中心に、直径27メートルの内帯と、35メートルの外帯の三重構造からなり、(近年四重の環が途中まで造られているのが見つかった)保存状態は良い。

この遺構を構成する石は約2000個ほどのものだが、これらは近くの荒川から50メートルの崖を越えて運ばれたもので、最大の石の重さは1トン近くあると思われる。

この小牧野遺跡では、瓶棺が三つ見つかり、土偶や特種な土器や石皿などが出土し、日常的なものは出土せず墓地であり祭祀に関係あったものと考えられる。

ただ同じ祭祀に関係があり墓地と言っても、大湯と小牧野とは、多数の墓塚と三つの瓶棺と形も数もともに異なっているので、同種のものと直ちに考えることは困難であらう。

同時期の縄文文化と言っても、地域ごとに特色があり、東北北部のこれらのストーンサークル圏と北陸地方の文化圏とはさらに異なっている様に思える。

なお三内丸山遺跡の木柱や大型建造物の柱は、35センチの倍数の間隔で建てられているが、小牧野のストーンサークルも同じ35センチの倍数を基準として造られたものと考えられており、このことは身体の一部を尺度とした共通の縄文尺といったものがあつたように考えられる。

ストーンサークルと木柱の円環を比較した場合、円環と言う点では同じだが、それと太陽との関係を考えて、大湯のストーンサークルは、夏至の日没の方向を指し、チカモリ遺跡や真脇遺跡の場合は真円という特徴があるわけだが、太陽との結び付きと言った点では、緑の中に住んでいた縄文人にとって太陽は現代の私たち以上に強い印象を与えた何かであつたと思われる。

巨木にしろ莫大な数の石にしろ、それを運び構造物を造ることは、計り知れない多量の労力が必要なわけで、このことは七年ごとに

行なわれる諏訪大社の御柱祭から見ても明らかである。御柱祭の場合はあえて「川越し」や「木落し」といった難所を設けているわけだが、このことはその困難さを思い起こさせる手段であろうが、縄文時代の場合の困難さははかり知れない。ただそれを可能にするネットワークが、集団として住んでいるか分散しているかは別として、当時あったと言うことは確かである。

縄文時代の人口は、中期に最も多く25万から27万ほどと言われるが、(その実態はこれから一層解明されようが)それらの人々を養うため豊富な森林と海(または湖)の幸といったものが東北地方や日本海沿岸やその他の適地にあったわけである。

ウルム氷河期以降の気候の変化

日本列島の場合、気候の変動により照葉樹林帯とブナ樹林帯との消長があるのだが、食料となるドングリなどの木の実、照葉樹林に少なく、ブナ樹林には多い。これら二つの樹林帯によりアク抜き技術も異なる。また漆といったものもブナ樹林帯でも多用されその技術も高い。(津軽塗は縄文時代の伝統を受け継ぐものであろう)

この二つの樹林相の変化を考えるために、ウルム氷河期以降の気候の変化、特に2万年以降について見ておこう。

ブナ樹林はナラ樹林帯の中の水気の多い地に特徴的なもので、東北アジア全体を考えた場合はブナ樹林帯と言うよりもナラ樹林帯として考えておく必要がある。(ブナ樹林帯の景観は、近年ユネスコの世界遺産となった秋田県と青森県にまたがる白神山地の写真などにより世界的に知られるようになった)

ただ気候と文化との関係を考える際に、文化とは人類がその時々にもた場所ごとの環境によりよく適応するために生れたものであり、気候の変化が直ちにその年の粟や稲の収穫に影響するのとは異なり、若干のタイムラグを

ともなうもので、気候の寒冷化が直接にまた直ちに文化の衰退をもたらすものではないことも考えておきたい。この点流行性の病原菌は直接に人間の生命を奪うだけにその影響はより深刻である。

日本の場合、海外との交流により歴史上しばしば伝染病が侵入してきた。縄文人にとってもこのことは同一である。ただ残存遺体から確認できるのは、骨にその病痕が残る結核だけだが、天然痘やインフルエンザ等の流行も考えられる。縄文人口が激減するのは(晩期末は中期の3分の1となったと言われる)、気候の変化、稲作を伴った弥生人との混血もあろうが、それ以上に稲作を行う人々により伝えられた各種伝染病が、免疫のない縄文人を激減させたことが予想される。(大和朝廷時代の天然痘、大航海時代の熱帯性マラリア、明治の文明開化の頃のコレラなどはその代表例であり、またアイヌへの和人からの伝染病の感染もよく知られている。アイヌの神話では天然痘は格の高いカムイであり、江戸幕府は天然痘の予防のために種痘を熱心に行なったことがアイヌ絵によっても知られる)

ところで、目下の主題にそって気候の変化を考えてみるのだが、今から7万年から1万年前までは、若干の消長はるにしろ全体的には地球上の氷河は増大し海面は下がっていった。これがウルム氷河期(または最終氷河期)だが、目下の考察する2万年前から現在までについてより詳細に見てみよう。

ウルム氷河期の最盛期の1万8000年前は、地球の9%が氷におおわれ海面の水位は100メートル以上低下し、日本付近でも6度C程低かった。気候は1万3000年前頃から温暖化し、1万1000年頃寒さのもどりがあがるが、1万年ほど前から急激に温暖化する。7000年前にまた寒くなり6000年より少し前に最も暖かくなる。4500年前に少し寒くなりまた暖かくなり、2700年ほど前から急に寒くなり2500年前頃が最も寒く2300年前頃からまた暖かくな

るといった経過を辿っている。最近の1000年については、9世紀から13世紀までが暖かい時期で、それは15世紀頃までつづき、16世紀中頃から19世紀までは寒い時期である。日本でもこの時期飢饉が続く、20世紀前半には温暖化が進みそれは過去数百年と比較しても非常に高温であった。1950年以降気温は次第に低下し1970年代に入って再び暖かくなりそれが現在まで続く。

これらの気候の変化は、それがどの程度の寒さに下がったかとともにどの程度急激であったかといった点が問題となる。

三内丸山の縄文人には4500年前の寒冷化は、寒さに弱い粟の収穫減や、海が遠くなるといった点で大きな影響を与えたと思われる。

2500年前の寒冷化は、4500年前の寒冷化よりも大きかっただけに（それは7000年前に匹敵する）、アジア大陸の遊牧民にも大きな影響を与えた筈であり、遊牧民の南下といった事態を招き、それが中国の混乱の基となるわけで、それがひいては水田稲作の適地を求めて日本列島への稲作民族の流入といった結果となる。

ところで日本を包む海洋の特徴を日本海を例にとりて考えてみよう。日本海は世界全体の0.28%ほどの小さなもので、100万平方キロほどのものである。

世界地図を見れば、北陸から東北にかけての日本海の緯度は、地中海で言えばスペイン南部やギリシアと同じであるのだが、そこが有名な豪雪地帯となっている。これは水気の多い対島暖流が流れ込んでおりそれが急激に冷やされるからなのだが、暖流の流れと言ったものは、日本海のような小さな海の場合は海面の高低に大きく影響される。日本海沿いに稲作の適地が多いが、それは海拔10メートルに満たない平地であり、縄文海進の際に砂や泥が海底に積もったものが海退により陸上となったものである。海進、海退といった自然の変化は、文化のタイプによりプラスにも

マイナスにも作用するものである。

なお真脇遺跡について言えば、そこには、6000年前という最も暖かい時期に人が住みつき、2300年前まで住み続けたと言うことは、まさしく最近の最も寒い時期まで住み続けていたと言うことで、とうとうそこを放棄したと言うことは、廻遊性のイルカの来る他の適地を求めたのかも知れず、またその他の居住条件の悪化により他に移ったのか明らかではないが、寒冷化が大きな影響を与えた適例と考えられる。

一万年前後の海面の高さについては、日本海では富山県入善町吉原沖で興味のある海底樹林帯が発見されている。それは海面の高さを直接示すものである。その海底樹林とは、90本以上のハンの木や柳の類から成るものだが、埋没林が港湾改修の際などに発見される例は多いがそれが海底樹林として発見されたわけである。放射性炭素の測定結果によれば深さ40メートルの所で9000年前から1万年前、深さ20メートルの所で約8000年前といった結果が出ている。

海底樹林は、地上に成長していた樹林が、海進により枯死し、それが泥炭層におおわれた部分が残し、つづいて潮流により堆積物が洗い流され、堆積物の高さの樹木の下部が海底に現れ、それがたまたま発見されたと言うことである。

気候の変化については、地上や水底などのボーリングにより得られた土壌の花粉分析により調査の行なわれることはよく知られているが、寒冷期には淡水湖となり温暖期には海水が流入するといった湖底の場合、木の年輪のように幾千年もにわたって地層の一年ごとの変化を知ることが現在では可能である。

（これは年縞ともよばれるもので、一年の季節ごとの変化を珪藻類の発生を基準として調査するものでより詳細な結果が得られる）

交流のルートと文化圏

日本列島はさまざまなルートを通じて人間と文化との交流があったわけだが、それは時代ごと地域ごとにその重要さと容易さは異なっている。三内丸山遺跡を例にとれば、北海道の黒曜石、新潟のヒスイ、岩手のコハク、秋田の天然アスファルト言ったものが見つかっている。

ところで、これらの問題を考えるために、国内の近隣の交流圏の他に、次のような6つのルートを考えておこう。

第1は シベリア東北部からサハリン、北海道を経て東北地方に達するルートであり、それ以外にもオホーツク文化圏として南千島を含むルートがある。

第2は 環日本海文化と言ったものを考える立場で、日本海を直接渡って来る交流ルートである。これは時代は下るが渤海との交流ルートとしてよく知られている。

第3は 小笠原諸島を島伝いに經由するルートでポリネシアなどと結ぶものである。

第4は 揚子江下流から朝鮮半島南部を經由し北九州に達するルートで、日本への水田稲作の伝来の重要なルートと考えられるものである。

第5は 第4と同じく、揚子江下流から直接に西北九州に達するルートである。

第6は 南西諸島・琉球弧を經由し黒潮に乗り北上し南九州に達するルートである。このルートには東南アジアからフィリピン、台湾を經由するルートの他に、中国の江南地方から達するルートとの二つがある。

以上主要なもののみを上げたが、四方海に面する日本列東では、黒潮によって太平洋岸や日本海沿岸の各地に達する場合もあるが、

主たる交流ルートとしては以上6つを考えておけば目下の考察では十分であろう。

この中、第1、第2、第4、第5については改めて説明する迄もないだろうが、その他については若干説明しておこう。

第3の小笠原を經由するルートについては、普通、日本列島への人間と文物の交流ルートと考えることは少いが、現在無人島である北硫黄島の遺跡調査から、このルートの可能性は確認されているのだが、その影響については明らかにし難い。ただ母音優位の日本語の使用と極端に左脳に負担のかかる日本人の脳使用の特徴は、ポリネシア人との類似が指摘されている。(実験では在日中のトンガとマリオの人々について行なわれた) 近隣の韓国人や中国人の場合は欧米人と同じで日本人(この場合は日本語を第一言語とする人々)とは異なっている。このことは基本的な言語の問題であるだけに、時代は明らかにし難いが、何等かの密接な関係が現在のポリネシア系の人々とあったことが考えられる。(ニヴヒ<ギリヤーク>との比較も必要になるだろうが、このことはさらに時代をさかのぼりオストロネシア系言語との関係を予想させるものとして発展するものであろう)

第6のルートについては、江南地方からと東南アジアから、フィリピンを經由する場合とを分けて考えることが必要だが、ともかくこのルートは稲の流入路としてかつて柳田国男氏が『海上の道』で予想はしながらも、近年になって日本の稲の遺伝子の精密な分析により、その中の7%が熱帯型であり温帯型とは異なることが確認され、漸く肯定的と考えられる様になったものである。ただそれ以前にも海流や赤米やイモの伝達路から見て考えられていたものである。

これらの交流のルートは文化圏と言ったものを予想させるものだが、稲作の流入を考えてみても、北九州を例にとれば、三つのレベルの違った文化圏と言ったものを考えざるを

得ない。いずれを第一次とするかは、どちらでもよいのだが、より広域を第一次と考えれば次のような三段階となる。

第一次文化圏は、環黄海・東シナ海文化圏

第二次文化圏は、朝鮮半島南部と北九州の文化圏

第三次文化圏は、北九州だけの文化圏である。

第三次文化圏としての北九州文化圏は、同じレベルで西北九州や南九州の文化圏と対比されるが、それらは九州文化圏として（但し南九州の一部を除き）近畿文化圏と対するものである。またこの九州と近畿の文化圏は別のレベルの言わば第二次文化圏を構成し東日本の文化圏と対するもので、それは次章で考える亀ヶ尾文化圏を第三次文化圏とし東日本全体を第二次文化圏とするものにある時期までは対する。

時代は下るが倭の使者が唐へ言った時に、倭と言う名前がよくないので日本列島の東部・東北部の日本を併合して、倭の代りに日本と称したと言うことが中国の歴史書に記録されている。（注1）

この場合は近畿地方を中心とした倭（近畿・九州の文化圏）をさすが、朝鮮古代史に現れる倭とは北九州の倭の場合が多いので注意が必要である。（文化圏の自称は時代とともに変化する）

このことはすでに大和朝廷時代であるが、はたして大和朝廷が日本列島をどの程度支配したかは疑問である。日本列島の中には二つの文化圏が長く続いていたことは明らかである。現代でも、一例をあげれば電話の通話といったことも昼は日本全体で行なわれるのだが、夜間になると西は西と、東は東との通話が主となるが、その他の例をあげるまでもなく、日本の文化は最近まで東西二つの大きな下位文化からなっていた。

亀ヶ岡文化について

亀ヶ岡文化とは縄文時代晩期をかざる代表的なレベルの高い文化だが、それは単に日本だけでなく世界の新石器時代の最高峰の文化である。特に現在の言葉を使えば、その芸術性において優れている。（縄文晩期は前々章の気温の変化で述べたように、2700年前から急激に寒くなり寒冷化の時期は2300年頃まで続き厳しい時代が長い。亀ヶ岡文化の芸術性といったものはこの種の厳しさの下に又はそれからの脱出の際生まれたものと考えられる）

ただその言葉のもととなった亀ヶ岡遺跡については400年にわたる乱掘、盗掘のため遺跡は攪拌され、出土品の数々は江戸時代以降、好事家の手に渡り、明治になっては外国人により購入され海外に運ばれたものもある。

この遺跡については、元和九年（1623年）の津軽藩の事蹟を記した古記録『永録日記』の一月の記述には次のように書かれている。

近江沢御城築之事相止、此所城下相成候はば、亀岡と申可由。此所より奇代之瀬戸物掘り出し候所也。共形皆々かめの形にて御座候。大小御座候へ共、皆水を入れるかめに御座候。昔より多く出る所也。昔何の訳にて此かめ多く土中に有之事不相知候。其名を取て亀ヶ岡と申候也。云々

この辺りから土器の出土することは、亀ヶ岡と言う地名から見て、少くともそれ以前から知られていたことが分かる。

亀ヶ岡遺跡は津軽半島の日本海側の木造町にあるが、津軽平野は岩木川がいくつかの支流とともに流れている。津軽平野の標高は低く五所川原の市街地で7メートル程度と言われる。亀ヶ岡遺跡は標高20メートルほどの丘陵を中心とし、標高5～7メートルほどの低地に及んでいる。

前述の菅江直澄は三内丸山とともに亀ヶ岡をも訪れているが、亀ヶ岡遺跡はそれが有名であり出土品も多量に上るが乱掘も大規模で長年行なわれてきたので、現在、木造町の縄文住居展示資料館と遺跡の近くの縄文館とがあり出土物の展示等を行なっているが、優れた出土物は余り地元には残っていない。

縄文晩期を代表する遺跡の現状は残念なことだが、亀ヶ岡文化は津軽海峡をはさんだ東北地方北部と北海道南部とがその文化圏の中心であり、亀ヶ岡式文化圏以外でもその地域の遺物に混って亀ヶ岡式土器が出土しており、その北限は北海道東部の釧路市、南限は神戸市灘区に達している。亀ヶ岡遺跡からは芸術性の高い土器とともに、厳しい引き締まった顔と体型の代表的な遮光器土偶が出土している。遮光器土偶とはイヌイット（エスキモー）の雪眼鏡を掛けているように見えるのでつけられた名称だが、それが何であったかは多くの意見がある。

一般に新石器時代の土偶は生産や豊穡を祈る地母神像であると考えるのが普通である。日本の縄文時代については簡単にはそのように言いにくい面もあるが、三内丸山遺跡の泥炭層から出土した食料とされた栗のDNA分析から見て、それらが栽培されたものである可能性が高いのでさらに時代の下る縄文晩期においてそれが地母神的性格を持っていたことを想定することは可能であろう。（日本での最古の土偶は縄文草創期の三重県粥見井尻（かゆみいじり）遺跡の住居跡から1996年に出土した全長6.8センチほどのものである）

しかし縄文中期の、平板型の人間の顔を表わす土偶と比べて、遮光器土偶は一見してかなり異なっており、トンボのような大きな目や王冠または特種な髪型で、身体全体を亀ヶ岡式の紋様で飾り、どっしりと大地を踏みしめるもので、遮光器土偶はより祭祀における重要なシンボルであったように思える。

トンボの様に大きな目は、シュメールの人

形のように世界全体を見つめるもののように思えるし、また同時に赤子の相対的に大きな目をも連想させる。身体の部分は女性と考えるので、天を見据え地を踏みしめた、地母神というよりもより多く宇宙神とでも言ったシンボルではないのだろうか。その証拠と言っただけではないが、はじめの内は、最初から破壊されるように作られており、死後の世界の護りといった意味で考えられたものが時代が下るにつれ完全な型で出土するようになるので、それはそのまま現世と死後とを共に支配すると言ったような観念の拡大の結果と考えてよいのではないだろうか。最初に発見された（明治19年発見と言われる）代表的な亀ヶ岡遺跡出土のものは左足を欠いており高さは34.5センチであるが、近年（1995年）出土した45センチの最大の土偶（山形県舟形町、西ノ前遺跡出土）は大胆な現代彫刻に劣らない抽象的な作品でありまた別種の逸品である。（過日、電車の中で余りにも遮光器土偶と似ている顔の女性がいるのでびっくりした事がある）

亀ヶ岡文化を代表するのは土偶とともに、工芸品に最高水準にあると思われる土器や木製品がある。それらを考えるために、この種の作品が豊富に整然と地元で展示されている八戸市の是川・中居遺跡について述べておこう。

是川・中居遺跡は、亀ヶ岡式文化の代表的遺跡なのだが紹介されることは比較的少ない。発見されたのは大正9年（1920年）の10月であり、優れた木製品を大量に含む泥炭層の発見は大正15年（1926年）のことである。

是川・中居遺跡は八戸市大字是川字中居にあり、出土品はその中居にある縄文学習館の中の歴史民族資料館に整然と展示されている。

地形は新井田川左岸の標高50メートルから傾斜する標高13メートルの範囲で是川遺跡の中心地には標石とともに縄文観音像と言う不思議な大きな観音像が建てられている。それ

がどういう主旨であったのかははかり難いが、ある種の縄文土偶のイメージを引きつぐのかも知れない。(若干、その額は遮光器土偶に似ていなくもない)

是川・中居遺跡の数々の逸品は芸術的に見て極めてレベルの高いものだが、その種の芸術性——現代人にとって美として捉えられたものが一体どんな意味を縄文人に持っていたのかも少し考えてみよう。

新石器時代の人類は、金属や電気エネルギーの使用を知らないとしても現代人と同じ完新世の現代型新人であり、脳の容量も変わらないと思われる。(これは現代人でも個人差があるので、ほとんど変わらないと言った方がよいかも知れない) 金属の使用前であるのだが、亀ヶ岡文化とは使用可能な材料の最高水準であったと言ってよい。無論その間の時代により差はあるのだが、よく知られて亀ヶ岡遺跡出土品の風韻堂コレクション(青森県立郷土館蔵)の赤漆と黒漆で描かれた土器の紋様に典型的に表される赤と黒の色彩、とくに縄文人に愛好された漆の赤の色(多くは赤い漆塗りの土器や是川・中居遺跡出土の藍胎漆器などの)、それは太陽の赤を再現するものなのではないだろうか。

現在では、私たちはR・オットーの述べる様なヌミノーゼと言った聖という価値観を独立させて考えようとするが、縄文人にとって美と善とを含んだ聖といった観念があったのではないと思われる。このことは現代の日本人にも見られるような善や聖と言った価値意識を美というものに含めて考えようとする、別の言葉で言えば善とか聖とかいったものが行動の規範というよりも美が先行するという特有な傾向にも通ずるものであると言うこともできよう。

縄文文化の現代への復権は、昨年急逝された岡本太郎氏の1952年頃の精力的な発言に端を発するのだが、岡本氏は次のように言っている。

縄文文化というのがあるのは全然知らなかった。その頃は世界中ほとんど知られていなかったと思います。日本の美術史にも入っていませんでした。戦後のある日、上野の博物館に行って、考古学の部門の部屋で何気なく見たら、ケースの中に縄文土器がおいてある。あと思った。あんなに感激したことはない。これこそが「日本」だと思った。日本というとき、障子、格好のいい手先だけの絵、そんな小味なものばかりでがっかりしているときに、あの猛烈な縄文土器を見た。「あ、これは」と瞬間に感動したわけです。そして私は「縄文文化論」を書いた。これが本当の日本だと。それまで誰もあれを美しいと言った人はいなかったのです。私が書いたことはセンセーショナルだった。

(中略)

私がだいたい五千年前の縄文土器を見て、あと思ったとき、その瞬間、現時点で縄文文化が生きかえったわけです。

(中略)

だから縄文文化を本当につかもうとするならば、五千年前とかなんとかいうことを考えずに、あなた方が土器を見た瞬間に感動する、それでいいわけです。

「私の縄文文化論」(注2)

おわりに

まさしく岡本太郎氏の言う通りなのだろうが、この小論も、この種の驚きと共感の上にたって述べてきたものである。

信濃側流域の縄文中期の遺跡から出土する火焰土器ないし火焰型土器(1936年に長岡市馬高遺跡で出土し現在長岡市の科学博物館に展示されるものを火焰土器と呼び、他を火焰型土器と呼ぶ。十日町市の資料館に多数の火焰型土器が展示されている)は縄文中期のもので、それはまさしく強烈なエネルギーの奔流であり、岡本氏の絶賛したものだが、本稿では青森県北部のストーンサークルと北陸地方

の日本海沿岸の木柱を出土する遺跡と亀ヶ岡文化について考えた。

筆者はこのところ日本文化の基底部分について考察を進めているのだが、冒頭にも述べた三内丸山ショック以来、縄文文化とくにその信仰や現代では聖と呼ばれる価値領域について考えようとしており、本稿はその試みの一ステップを述べたものである。

考古学御専門の方から見て、多くの誤りもあると思われるがその点については御指摘頂ければ幸いである。

(注1)

『旧唐書』『新唐書』はともに唐代を扱った中国の史書だが、目下問題とする部分はいずれも列伝の東夷の中の倭国と日本についての記述である。『旧唐書』巻199上、列伝149上には「日本ハ、倭国ノ別種ナリ。其国ハ日辺ニ在ルヲ以テ、故ニ日本ヲ以テ名ト為ス。或ハ曰ク、倭国自ラ其ノ雅ナラザラ悪ミ、改メテ日本トナス。或ハ云、日本ハ旧小国ニシテ、倭国ヲ併スルノ地ナリ。』『新唐書』巻210列伝百45には、「倭ノ名ヲ悪ミ更ニ日本ト号ス。使者ラ言フ、国日ノ出ルニ近シ、以テ名トナス。或ハ云フ日本ハ乃チ小国、倭ノ併ス所トナル。故ニ其号ヲ冒ス。」これらの記述から考えられることは倭と日本とは別の国であったこと、そして『新唐書』のように倭が日本と称したということであろう。北上川の北上は日高見、常陸は日立であったろう。

(注2)

岡本太郎著 「私の縄文文化論」『古代日本の美と呪術』毎日新聞社 1976年刊から参考文献
三田史学会『亀ヶ岡遺跡』有隣堂出版、1959年刊(国書刊行会による復刊1984年がある)
新潟県青海町編『寺地遺跡』1987年刊

青森県教育委員会『北の誇り・亀ヶ岡文化——縄文時代晩期編——』1991年刊

八戸博物館『縄文の美——是川中居遺跡出土品図録第1巻、1985年刊、第2巻、1988年刊
青森県郷土館『縄文の玉手箱——風韻堂コレクション図録』1996年刊

梅原猛・安田喜憲編『縄文文明の発見——驚異の三内丸山遺跡』PHP研究所、1995年刊
梅原猛・渡辺誠『人間の美術1、縄文の神秘』学習研究社、1986年刊

矢崎孟伯著『諏訪大社』銀河書房、1986年刊
安田喜憲著『気候が文明を変える』岩波書店、1993年刊

奈須紀幸著『大気と海洋(改定版)』放送大学教育振興会、1996年刊

細野論夫著『日本海のおいたち』青木書房、1989年刊

小林達雄編『縄文時代における自然の社会化』雄山閣、1995年刊

佐々木高明『日本史誕生』集英社、1991年刊
マンダラ夢については、

C G ユング著、池田紘一、蒲田道生訳『心理学と錬金術1、2』人文書院、1976年刊
参照日本人の脳の独特な使用方法については

角田忠信『日本人の脳』大修館、1978年刊
聖と言う価値についてはオットー著山谷省吾訳『聖なるもの』(岩波文庫)岩波書店、1968年刊

他に関連文献として

文化庁編『発掘された日本列島』

'95新発見考古速報

'96新発見考古速報

朝日新聞社1995年、1996年刊

岡本太郎著『日本の伝統』光文社、1956年刊
米沢弘著『日本人の信仰の原風景』出光書店1996年刊

(追記)筆者はこの4月に定年退職するので、すでに『文教大学情報学部紀要』に連載した「x体験の研究」以来の一連の宗教体験研究のレポートは本編をもって終わりとする。

各遺跡の現況（いずれも1996年春から夏にかけて筆者の撮影したもの）

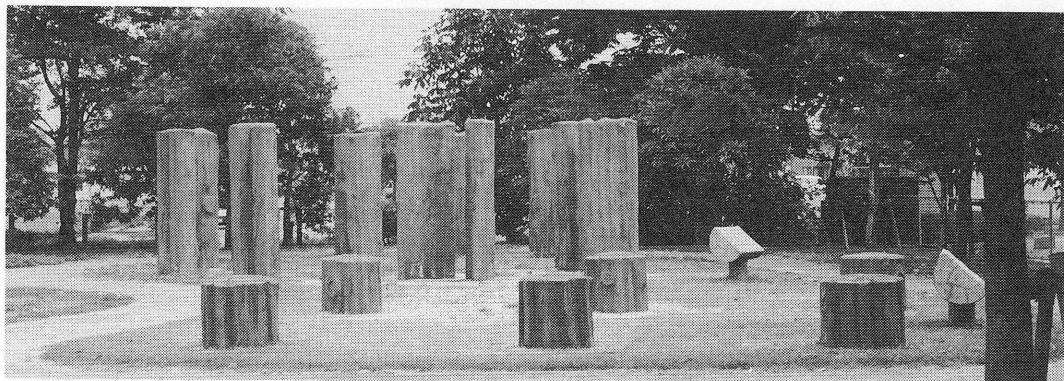


写真1 チカモリ遺跡の木柱列

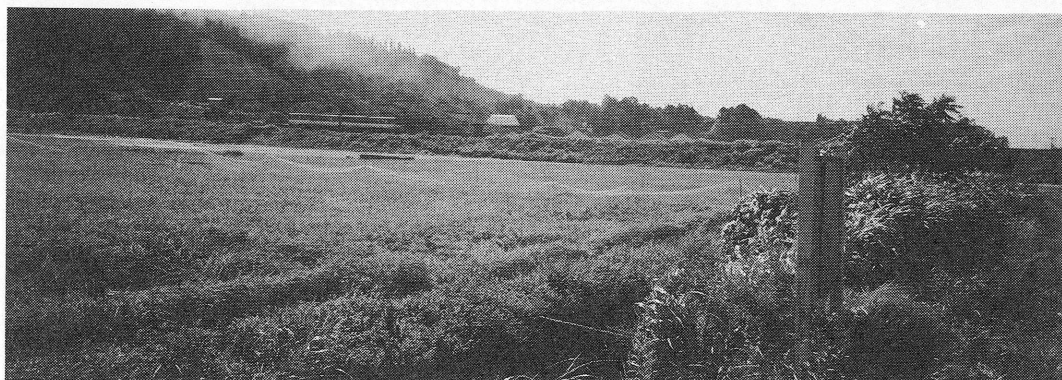


写真2 水田におおわれた真脇遺跡



写真3 寺地遺跡，遠方に見える建物はヒスイの加工場を復元したもの

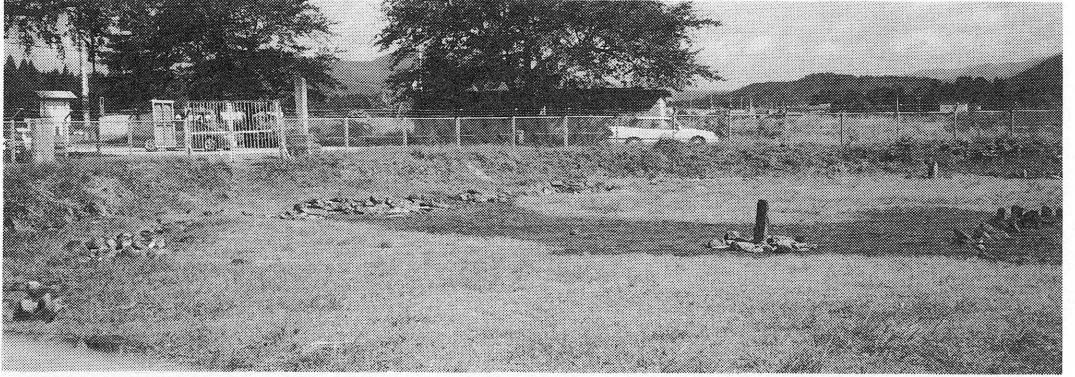


写真4 大湯遺跡，野中堂のストーンサークル中央に見えるのが，日時計型配石遺構

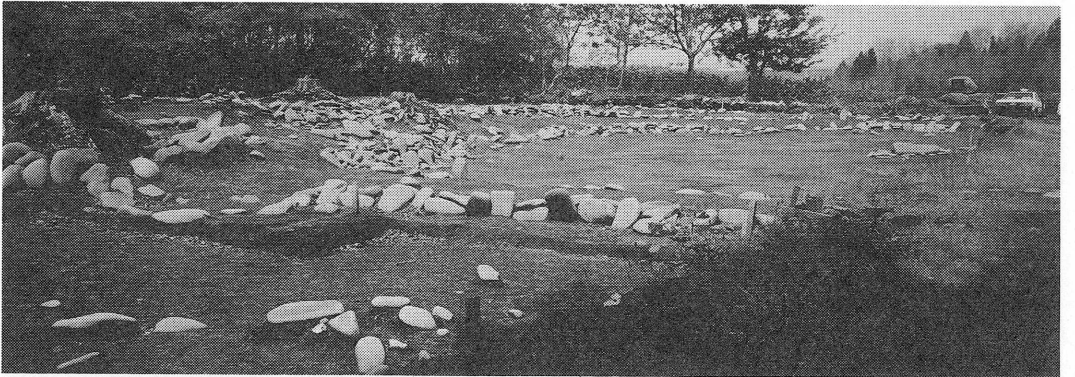


写真5 小牧野遺跡の三重の環状列石



写真6 亀ヶ岡遺跡，標式とともに拡大した遮光器土偶のレプリカが立つ。

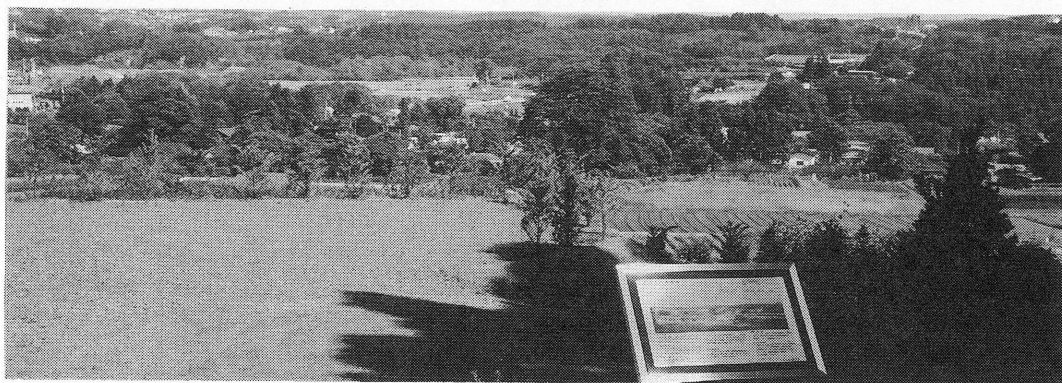


写真7 是川遺跡の標石附近からの遠望（標石と縄文観音は後方に立つ）

(1996年10月記)